

Contemplations における自然観の再考⁽¹⁾

吉 津 成 久

アン・ブラッドストリートの *Contemplations* (観照集) は、彼女自身のキリスト教信仰における「永生」(immortality) への目覚めと改心の体験をドラマ化したものである。その目覚めは、stanza 30 において、“hope of an eternal morrow” (永遠の目覚めの希望) ということばに表現されている。33のスタンザから成るこの詩は、時を黄昏時に設定しており、詩人にも人生の終りが近づいていることを暗示している。しかし、一方、スピリチュアルな面からは、新しい目覚めの時 (an eternal morrow) が近づいていることを暗示している。何故なら、詩人は、新生者たる詩篇の作者ダビデの心を心としてダビデになりきろうとしているからである。詩篇第 119 篇、148 節にあるダビデの祈り「わたしは、み言葉によって望みをいただくのです。わが目は夜警に先だって、あなたの約束を深く思います」(mine eyes prevent the night watches that I might meditate in thy word) は、まさに詩人自身の祈りである——stanza 28, 「夜明けに先だっておまえは歌をうたう…」(The dawning morn with songs thou dost prevent.)

Contemplations の stanza 19 までは、まだ真の目覚め、改心は起っていない。とくに最初の第 9 スタンザまでは、神の栄光は、自然に対する感覚的な理解によってしか知覚されていない。これは信仰の揺れ、そして挫折に導く危機をはらんだ状態といえよう。ニュー・イングランド到着後まもなく書き記したブラッドストリートの言葉がその状態をいいあてている。

That there is a God my Reason would soon tell me by the wondrous

works that I see, the vast frame of the Heaven and the Earth, the order of all things, night and day, summer and winter, spring and autumn…⁽²⁾

神が存在するという事は、私の理性にしたがえば納得できる。この目に見える驚異的な神の造作、天地の広大な枠組、万物の秩序、夜と昼、夏と冬、春と秋…によって。

まず第1スタンザでは、太陽(Phoebus)が自然の植物に色とりどりの装いをさせ、その美しさに詩人はうっとりとなっている。詩人の〈目〉は地上に向けられ、まだ太陽の方へは向けられず、心の中で太陽のことをもっている。(stanza 1)

次に詩人は、地上をこのように美しく色どる天の住人(太陽)を賛美する。まだ詩人の〈目〉は上に向けられていない。(stanza 2)

詩人の〈目〉が次第に上方に向けられ、堂々と立つ樅の木を見る。その長い年輪を想像して驚嘆する。だが、その長い寿命も「永遠」に比べれば無に等しいと思う。ここではじめて Time の観念が紹介される。(stanza 3)

詩人の〈目〉は、さらに高い所、太陽に向けられる。だが、それを直視することはできない。詩人の〈目〉と太陽の〈目〉(this Universes Eye)は、おい繁る木の葉から洩れてくる光をとおして間接的に出会う。太陽の栄光とその神性が人間と比較され賛美される。(stanza 4)

太陽の擬人化、つまり、太陽(花婿)と大地(花嫁)の結婚—sex と breed のイメージ、対立と融合による宇宙の無限なる輪廻転生、永遠なる Time の観念がある。(stanza 5)

太陽の権能(昼と夜の交代、四季の変転を司る)に対する賛美。(stanza 6)

太陽の栄光は、人間の〈目〉にはとらえられない。詩人は、このような太陽を創造された神を賛美する。(stanza 7)

詩人は前のスタンザで感じたように、神と太陽の栄光にくらべて自己(人間)の卑小さを自覚し、今はひかえめな〈目〉を天に向けて神を賛美

しようとするが、その歌が湧いて来ず、またも自己の愚鈍さをおもいらされる。(my humble Eyes to lofty Skyes I rear'd.../But Ah, and Ah, again, my imbecility!) 詩人の〈目〉は上から転じて下へ向けられ、人なき所、道なき道を一人黙してさまよい歩く。場所の移動とともに五官(〈目〉から〈耳〉へ)の移動も起りかけている。第1行の“silent alone…”が示す、孤独、無常感は次のスタンザの第7行“mute”につながり、〈見る〉生活をもたらす self-love, そして神なる他者との愛の連関に生きれない罪と孤独と死への暗示がある。そして、これは第10スタンザ以降のアダム、カインの罪へ呼応してゆく。(stanza 8)

第9スタンザは、“I heard…”ではじまる。己の無能さを自覚する詩人はもはや〈目〉を上に向けず、〈見る〉から〈聞く〉へのひるがえりが起りかけている。つまり〈目〉から〈耳〉、そして瞑想(contemplation or meditation)へとはいつてゆく。神と神の義の理解は、〈目〉を媒介とした感覚や理性をとおしてではなく福音(the gospel)からもたらされるのであるから、詩人は、神の「救い」の言葉を〈聞く〉心の用意をしておく必要がある。——「信仰は〈聞く〉ことによるのであり、〈聞く〉ことはキリストの言葉から来たのである」(ローマ人への手紙10章7節)、「もしあなたが盲人であったなら罪はなかったであろう。しかし、今あなたがたが〈見える〉と言い張るところに、あなたがたの罪がある」(ヨハネによる福音書9章41節)、「〈見ない〉で信ずる者は、さいわいである」(ヨハネによる福音書20章29節)——己を卑下する詩人は、虫に自己を identify し、人間よりもはるかに卑しい生物が高らかに造物主を賛美することに惹かれ、自分(=虫)が、かれらのように「さえずる」ことができないことを慨嘆している。(stanza 9)

かくして〈目〉による自然の賛歌は、神の栄光に目ざめるにはあまりにも弱すぎるのである。何故なら、いかに神から遠くはなれた者でも、神の被造物たる美しい自然の中に神の属性を発見することはできるのである。

Thy swift Annual, and diurnal Course,
Thy daily streight, and yearly oblique
Thy pleasing fervor, and thy scorching force
All mortals here the feeling knowledg hath,
Thy presence makes it day, thy absence night,
Quaternal Seasons caused by thy might:
Hail Creature, full of sweetness, beauty and delight. ⁽³⁾

あなた（太陽）の敏速な年毎のまた日々の歩みを、
あなたの毎日のまっすぐな道、また1年の曲った道を、
あなたのよろこばしき熱情、またその焼熱の力を、
地上の人間はみな感覚で知っています。
あなたが居れば昼ができ、あなたが居なければ夜となる。
四季のおとずれは、あなたの力によるもの、
やさしさと美と歓喜に満ちた神の被造物よ、万才！

（イタリックおよび…は筆者による）

つまり、感覚による知識 (feeling knowledge) と救いの知識 (saving knowledge) は異なるわけで、後者は、人類の墮落、罪、死、そして、キリストの和解による、救いの知識であって、第9スタンザまでの詩人の態度は誤てる目覚めを証拠だてるものである。なぜなら、人間の理性と感性は、アダム以来、神なる存在を知覚する力をうばわれており、ただ聖書に記された神の言葉に全身全霊を傾倒する以外に道はない。ダビデの祈り “mine eyes prevent the night watches that I might meditate in thy word” に呼応する詩人の呼び “The dawning morn with songs thou dost prevent” は未だ聞かれず、スタンザ28まで待たねばならない。

〈見る〉から〈聞く〉へのひるがえりは、自己の実体を認識しようという態度に向かわせ、詩人は己の identity を求めて、今日の自己を築いてきた人類の系譜をたどり、過去へ hark back することによって Time の永遠

性を夢見る。だがその永遠性は、「想像」による「まがいもの」(It makes a man more aged in conceit) であって、やがて現実にもどることによってその壮大な夢は破られる運命にある。(stanza 10)

詩人の Time は過去へ過去へとさかのぼり、ついにエデンの園に来て、人類の始祖 Adam の栄光と墮落を見る。アダムの妻イヴとその子カインの呪われた罪と罰。カインの弟アベルに対する嫉妬。〈目〉による〈見る〉ことによる罪のめばえ、カインの兄弟殺しの罪と、以後血を吸いこみつつける大地、カインの審判と追放、カインの孤独と他者への恐れ、不安、憎しみ、アダム——カイン——現代人に受けつがれてきた罪 (Cloath'd all in his black sinful Livery)。Time は過去から現在へ近づく。(stanza 11～16)

詩人は現実にもどり、Time の永遠化、その壮大な夢は崩壊し、空しさがのこる。この人類の長い歴史にくらべて、われわれの人生の Time はあまりにも短いのだが、それに加えて、われわれは、現在を真の意味での永遠につながるようにほんとうに生きてはいない。未来におとずれる永遠の闇への不安と恐怖。(stanza 17)

詩人は大自然における植物と人間性を比較する。植物は Time の横暴性に対して無感覚であり、かれらには死と再生がある。だが人間に死はおとずれても再生はない。(stanza 18)

環境調和的に生きる動植物は、神の Providence に忠実であり、環境超越的に生きる人間は、知恵と気高さを与えられてはいるが、Time の奴隷であり、〈見る〉能力によって自然を観察、分析し、改善し、征服し、破壊する。そこに罪の呪詛を背負う宿命がある。(stanza 19)

詩人は自問する。それでは、空や木や大地は、人間よりも大きくて強く、Time の奴隷ではないのか？ いやいや、彼らもいつかは死滅する。だが人間は、永遠に不死身になるように創造されているのだ。(stanza 20)

stanza 18 と 19 におけるアダムの墮落からくる人類の絶望的運命についての詩人の発言と対照的に stanza 20 では、上に挙げたように、180度転じて「人間は不死身になるように創造されているのだ」(man was made for

endless immortality) とうたう。この肯定的信仰告白を予測するような前言はみあたらない。魂の覚醒、再生は、このように突然の啓示から生まれるのか。もちろん詩人は意識してはいないが、stanza 1 からこれまでの否定的信仰経験が信仰への真剣な願望を産むに至ったことは否めない。stanza 19 では「人間は生れる (born) と忘却 (oblivion) の運命をたどる」とされている。しかし stanza 20 では、詩人は、「それではわたしはそこに住みたい、人の子として生れなければよかったと思うだろうか?」と自問し、それに対して大きく「否」(Nay) と答える。— Shall I wish there, or never to had birth— この魂の再生は、stanza 19 における「誕生」とは全くちがった「誕生」である。今や詩人は、神の恩寵が彼女の体内に吹きこんだ神学的に正しいヴィジョンを示す。空や木や大地はもはや stanza 9 までに見られたように「力と美」の状態で見られない。人類ではなく、かれら空や木や大地が「暗くなり、滅び、色あせ、死滅するのだ、もはや作られなければ永遠に横たわるだけだ」(shall darken, perish, fade and die, / And when unmade, so ever shall they lye,) 詩人は、ここで、大地のもつ「いつわりの」(lying) 美しさや若々しさについて言葉の遊び (pun) を駆使していることがわかる。かくして、stanza 20 を境にして詩人の自然に対するヴィジョンは一変する。まさにこの stanza 20 は、起承転結における「転」にあたるといえよう。

stanza 21 から 23 の各々は、生れかわった魂の神と結びあう願望をうたっている。— 「おまえはまさにわたしが最善と考えることの象徴だ。ああわたしも先頭に立ってわたしの小川たちを休息に導き、いっしょに、あの永遠に祝福された大邸宅 (神の在所) におしかけることができれば。」(Thou emblem true of what I count the best, / O could I lead my rivulets to rest, / So may we press to that vast mansion, ever blest.) (stanza 23) 詩人が今佇むところは、「にれの太木のすずしい木蔭、美しい川のほとり」(Under the cooling shadow of a stately Elm / ... by a goodly Rivers side) (stanza 21) であり、この象徴的場面は、ダビデの詩篇 1 章 3 節を想起させる。— 「このような人は、流れのほとりに植えられた木の時が来ると実

を結び、その葉もしぼまないように、そのなすところは皆栄える」また、 stanza 21 の「美しい川のほとりの木」は、ヨハネ黙示録22章1, 2, 5節に出てくる川と木を暗示している。——「御使はまた、水晶のように輝いているいのちの水の川をわたしに見せてくれた。この川は、神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れている。川の両側にはいのちの木があって、十二種の実を結び、その実は毎月みどり、その木の葉は諸国民をいやす。…夜はもはやない。光もいらない。主なる神が彼らを照らし、そして、彼らは世を限りなく支配する」この象徴的な再生の願望を詩人はくりかえす、命の川と永遠の光あふれる場所を求めて——「わたしはかつて蔭の多い森をこよなく愛したが、今は川の方が木にまさると思った。そして太陽が常にかがやいていれば、わたしはそこに住みたいと思った。」

魂の再生を遂げた詩人を次に待ちうけているのは、Christian Warfare である。戦闘者は2種類の「魚」にたとえられている。 stanza 24 における魚は自然（本能）にしたがって生きる。 *Contemplations* の最初の9スタンザにおける詩人のように、これらの魚は神による罪のあがないを知らないし、喜び (felicity) を自覚しない。かれらの行動は四季によって支配されており、本能的生き方をつづけるだけである。かれらが滑走するのは沿岸領域にかぎられており、無数の稚魚 (numerous fry) を湖や池に置いてゆくが、大海 (ocean) すなわち that vast mansion, ever blest (神の在所) に到達できない。このように、再生できず神からきりはなされている魚と対照的に、 stanza 25 における魚（「大きなやつ」 great ones) は、神より選ばれた者の象徴である。彼らの「武具はその鱗で、かれらの広げられた鱗は盾となる」(Whose armour is their scales, their spreading fins their shield.) これは、エペソ人への手紙6章13節にある「神の武具」(the whole armour of God) と「信仰の盾」(the shield of faith) へのアリュージョンであろう。このように、 *Contemplations* の最初の9つのスタンザにおける詩人の自然観は、 stanza 20 を転機に stanza 21 以降の自然観と明確な対照を成している。詩人のはじめの自然観は、感覚的、官能的であり (Rapt were my senses at this delectable view——わが五官はこの美しき眺めにうっと

りとなった…stanza 1), 一方, あとの自然観は, 信仰に裏打ちされている (thou emblem true of what I count the best — おまえはまさにわたしが最善と考えることの象徴だ…stanza 23)。つまり, これは, 「自然の状態にある」(in a state of nature) 人間と, 「神の恩寵に浴している状態にある」(in a state of grace) 人間との鮮やかな対照である。⁽⁴⁾

詩篇第19篇は, アン・ブラッドストリートに *Contemplations* 全体の主要なインスピレーションを与えたとおもわれる。詩篇第19篇 4, 5節はこうである。——「神は日のために幕屋を天に設けられた。日は花婿がその祝の部屋から出てくるように, また勇士が競い走るように, その道を喜び走る」一方, *Contemplations* の stanza 5 には次のような言及があった。——Thou as a Bridegroom from thy Chamber rushes,/And as a strong man, joyes to run a race,/The morn doth usher thee with smiles and blushes;/The Earth reflects her glances in thy face (あなたは花婿のごとく, 私室からとび出し, 力強い若者のごとく, 喜び勇んで走り出す, 朝は, 微笑を浮かべ, 顔を赤らめながらあなたを迎え入れる。大地は, あなたの顔にはじらいの視線を送り…), まだこの時点では詩人の自然に対するヴィジョンは誤ったヴィジョンであったが, 今, 改心した魂のとらえたヴィジョンから眺めなおすと, sun=Son (Christ) の象徴的図式が鮮やかによみがえってくるのである。ブラッドストリート晩年の詩 *A Weary Pilgrim, now at Rest* は, 次のことばで終わっている。——Lord make me ready for that day/Then Come deare bridegrome Come away (主よ, 願わくはその日にそなえ準備させ給え, その時は, 愛^{いと}しの花婿さん, 天から迎えに来て下さいね)

詩篇第19篇の結びはダビデの祈りである——「わが岩, わがあがないぬしなる主よ, どうか, わたしの口の言葉と, 心の思いが, あなたの前に喜ばれますように」。ダビデの罪のあがないを求める願いは, ブラッドストリート自身の願いであり, ダビデの「口の言葉」と「心の思い」(his meditation and his words) が神の前に喜ばれますように, という祈りは, 信仰者であると同時に詩人である彼女の生きざまが神によってよしとされるこ

とを願うブラッドストリートへの祈りでもある。また、神学における予表論 (Typology) からすれば、ダビデはキリストの予表 (Type) である。と同時に、ダビデは彼女に、信仰上はもちろん、詩作上のインスピレーションを直接的にあたえてくれる存在である。

詩人は、stanza 24 で、クリスチャンの信仰上のたたかいについて黙想にふけっていると、突如、美しい声をしたフィロメル (Philomel) に魅了される。ここで、〈見る〉から〈聞く〉へのひるがえりは決定的となる (I judg'd my hearing better then my Sight)。このフィロメルは、詩篇の作者ダビデをあらわしている。すでに冒頭にのべたごとく、stanza 28 の第1行で、詩人はフィロメルに向って、“The dawning morn with songs thou dost prevent,” (夜明けに先だっておまえは歌をうたう) と呼びかけた。これは詩篇第119篇147節における神に対するダビデの祈り “I prevented the dawning of the morning, and cried: for I waited on thy worde.” をパラフレーズしたものである。このフィロメル=ダビデのパターンを成立させているものは、両者ともに、“I waited on thy worde” とあるように、この地上にあって、やがて滅びる肉の世界にではなく、神の言葉が約束する永遠なる霊の世界にすがる生き方に目ざめた (inspired) 存在である、ということである。ここに登場するフィロメルは、このように聖書への言及から、a spiritual bird であって、それは、この世のものに関心をはらわない (Reminds not what is past, nor whats to come dost fear…stanza 27) し、その食物は、“thy meat is every where” とあるように、ヨハネの黙示録2章17節における、恩寵と救済の約束をあらわす食物マナ (Manna) を暗示している。そして、このヨハネ黙示録2章17節は、*Contemplations* の結末部である stanza 33 にパラフレーズされている。

O Time the fatal wrack of mortal thing
That draws oblivious curtains over kings,
Their sumptuous monuments, men know them not,

Their names without a Record are forgot,
Their parts, their ports, their pomp's all laid in th' dust
Nor wit nor gold, nor buildings cape time's rust;
But he whose name is grav'd in the white stone,
Shall last and shine when all of these are gone,

おお生ける者を死滅させる「時」よ、
王侯たちの頭上にも忘却のカーテンを引き、
かれらの豪華な遺物も世人は知らず、
記録からはずされたその名は忘れられ、
かれらの才能、住家、威厳のしるしは
すべて塵の中に横たわり、
知恵も、黄金も建物も、「時」が付け
る錆を免れることはない。

しかし、その名が白い石に刻まれる者は、
これらのすべてが消滅しても、彼だけは
永遠に生き、光り輝くであろう。

ダビデが詩のインスピレーションと永遠の命を求めて神に向って
“quicken me”（私を生かして下さい…詩篇第119篇149節）と叫ぶように、
ブラッドストリートも「生かされること」(to be quickened)を望み、フィ
ロメルと共に飛躍し、神を賛美するとともに、靈的にも詩的にも命の息吹
を注がれることを願っているわけである。したがって、神の「命のこと
ば」(inspired word)を歌いあげる「陽気なフィロメル」(merry Philomel)
は、詩人にとって、詩のインスピレーションをもたらすだけでなく、「永
遠の目覚め」(an eternal morrow)を導く存在になるわけである。まさに、
フィロメル、すなわちダビデは、詩人の二つの召命感——神を賛美する詩
人および信仰者としての——を両立させる役割を果たしたわけである。

註

- (1) 本稿は、拙著『アメリカ詩の原点』（昭和52年11月30日発行。学書房）中に最初発表し、のちに『英米文学研究』（梅光女学院大学英米文学会発行）、あるいは『キリスト教文学』（日本キリスト教文学会九州支部編）において論考を加えてきた、アメリカ最初の女流詩人 Anne Bradstreet の *Contemplations* を、自然観の転機という面から、聖書、とくに詩篇への allusion をとおして論考したものである。
- (2) John Harvard Ellis ed., *The Works of Anne Bradstreet, in Prose and Verse*, (Reprint), Peter Smith, Gloucester, Mass., 1932, p. 243.
- (3) *Contemplations* および他の作品の text は上記(2)の他に、Harrison T. Meserole ed., *Seventeenth Century American Poetry*, Anchor Books, Doubleday & Co., Inc., Garden City, New York, 1968 を使用した。
- (4) Helen Saltman, 'Contemplations': Anne Bradstreet's Spiritual Autobiography, *Critical Essays on Anne Bradstreet*, G. K. Hall & Co., Boston, Mass., 1983, p.232.